

博士学位論文審査要旨

申請者	柴田 希		
論文題目	谷崎潤一郎と映画——映像文化を視座とする谷崎文学の考察——		
申請学位	博士（学術）		
審査委員			
主査	千葉俊二	早稲田大学教育・総合科学学術院教授	
副査	石原千秋	早稲田大学教育・総合科学学術院教授	
	和田敦彦	早稲田大学教育・総合科学学術院教授	
	五味渕典嗣	大妻女子大学准教授	

1、本論文の目的と構成

本論文は、谷崎潤一郎の映画体験をその文学的営為と関連づけながら、谷崎文学のなか
にそれを位置づけると同時に、映像メディア史のなかでその意義を解明することを目的と
している。谷崎潤一郎は、初期作品の「秘密」から「人面疽」「小僧の夢」「アゴ・マリ
ア」「肉塊」「痴人の愛」「青塚氏の話」、最晩年の「過酸化マンガンの夢」に到るま
で、映画に材を得た小説を多く書いているが、一九二〇年に大正活動写真株式会社（のち
大正活映株式会社と社名変更）の脚本部顧問に招聘されると、二年足らずの短い期間であ
ったが、実際に黎明期の映画製作へ積極的に携わっている。谷崎と映画のかかわりは、紆
余曲折しながら終生つづき、谷崎文学の足跡は映画の発展と軌を一にしている。

これまでの谷崎文学の研究においても、谷崎と映画の問題が無視されてきたわけではな
い。が、本研究においては同時代のコンテクストを再構築し、その文化的現象のなかで谷
崎の小説やエッセイを把握しようと努め、映画がはじめから現在のようなメディアとして
あったわけではなく、人々や社会と相互に干渉しながら、歴史的に構築されてきたものだ
という視座から、視覚的なイメージに強く惹かれた作家である谷崎の文学の特性を論じて
いる。そうした方法的な意識にもとづき、文学研究と映画研究の双方を見すえた学際的な
アプローチとなっている。つまり、従来の文学研究における文学中心主義的な立場から行
われてきた研究を、視覚的なイメージの「表現」によって、どのような「藝術理念や言語
表現」を模索し、生成させていったかをあとづけることで、谷崎潤一郎の文学の研究をさ
らに一步押し進めようとしている。

以上の方法論的視座のもとに、本論文は四部構成の九章からなっているが、以下、目次
によって全体の構成を示せば、次の通りである。

序章

第一部 谷崎文学の藝術理念

第一章 谷崎文学と映画

——〈Crystallization〉が照射する藝術表象の煩悶

第二章 モンタージュによる美の形象化

——「青塚氏の話」を中心に

第二部 〈映画を〉表象するテキスト

第一章 映画と魔術の有機的な関係

——「小僧の夢」論

第二章 純映画劇運動の両義性

——「人面疽」と大活

第三章 スクリーンに現れた〈恐怖〉

——「人面疽」論

第三部 谷崎文学の周辺

第一章 谷崎潤一郎の〈映画離れ〉

——ドイツ映画『ヴァリエテ』を手がかりに

第二章 「春琴抄」映画化

——島津保次郎『お琴と佐助』

第四部 映画と文学の交錯

第一章 映画への接近

——芥川龍之介「蜃気楼」から谷崎潤一郎との論争へ

第二章 大正期の映画物語本

——映画を〈読む〉ということ

終章

2、論文の概要

第一部「谷崎文学の藝術理念」は、本研究の指針となる論考で、昨今の谷崎と映画に関する研究の高まりに対する問題提起として、横断的なテキスト分析をとおしながら、映画が谷崎文学にもたらした影響について論じている。

第一章「谷崎文学と映画——〈Crystallization〉が照射する藝術表象の煩悶」では、谷崎が映画論「活動写真の現在と将来」で映画の藝術性を説くために依拠した〈Crystallization〉を視座に、大正期から戦後の創作営為を貫くモチーフ（表象の純化）を論じている。表象の純化ということは、藝術の要諦であり、谷崎の藝術理念や谷崎文学における美のイメージとも深く関わっている。谷崎文学の流れを、映画を視座とすることで〈映画を／映画で／映画のように〉表象する位相に分けて、今後の研究展望に繋げている。

第二章「モンタージュによる美の形象化——「青塚氏の話」を中心に」は、「青塚氏の話」や「痴人の愛」に端的な、女性の肉体を断片化する描写の考察を通し、〈映画で〉表象することから〈映画のように〉表象することへの移行を論じている。女性の肉体の断片化と統合は、クローズ・アップと、部分的かつ非連続的なショットの寄せ集めであるモンタージュという映画技法そのものの藝術的表現と関係しており、〈映画のように〉表象することに仮託された谷崎の藝術理念を明らかにする。

第二部「〈映画を〉表象するテキスト」は、〈映画を／映画で／映画のように〉表象す

るといふ谷崎文学における位相のうちで、「小僧の夢」「人面疽」などの〈映画を〉表象するテキストを対象に論じている。谷崎は欧米映画との連動性のなかで日本映画や日本の映画文化をとらえて、批評意識を養っているが、そうした批評意識がそれらのテキストの生成過程でどのように取り込まれているかを考察する。

第一章「映画と魔術の有機的な関係——「小僧の夢」論」では、『ジゴマ』（一九一）の封切を契機に、映画という新しいテクノロジーに対する畏怖が、映画害悪論へと発展した文化的現象に着目しながら、「小僧の夢」が虚構と現実世界とを転倒させる映画のリアリティを受け入れ、その虚構と現実との転倒という特性が主人公庄太郎の〈墮落〉のプロセスに仮託されるとしている。ここには映画が社会的に独自の領域を獲得してゆく同時代状況を垣間見ることができて、谷崎が映画によってもたらされる認識の変容を、みずからの藝術論へも取り込んでいった様子が確認できると論ずる。

第二章「純映画劇運動の両義性——「人面疽」と大活」は、「人面疽」という作中に語りだされた映画鑑賞に関する描写を、同時代の映画鑑賞の形態と照合しながら、谷崎の映画理念の一端を論じたもの。大正期の日本の映画文化を特徴づけた弁士の排除によって日本映画の近代化を急ぎ、映像のみで表現する映画の自律性を希求した谷崎は、日本の映画の近代化をめざした帰山教正らの純映画運動と軌を一にした。両者は欧米映画の隆盛を目の当たりにして、日本映画の国際化は急務と考え、それぞれ映画制作に従事したが、帰山が映画の形式だけでなく内容の欧米化も志向したのに対して、谷崎はあくまでも内容面では日本的なものを求め、文化的地域性を尊重したと考察している。

第三章「スクリーンに現れた〈恐怖〉——「人面疽」論」では、「夜遅く、たった一人で静かな部屋で映して」鑑賞することで、不可解なフィルムが引き起こす怪奇現象を映画そのものの寓意ととらえ、撮影者の意図を超越するところに生じたものが表現へ参画してしまう〈恐怖〉が現出する映画の特質について論じている。パースの記号論を援用しながら、〈恐怖〉に端を発する不可解な謎を、社会通念に従い理解しようとする主人公の百合枝たちは、類似（アイコン）的な眼差しに束縛された観客で、〈恐怖〉を自覚するM技師は類似（アイコン）的な眼差しから解放され、〈いま - ここ〉にはない未知の事象あるいは新しい視覚体験を享受するとされる。「人面疽」には、このような原初的な映画体験が描かれたのだと論ずる。

第三部「谷崎文学の周辺」は、谷崎の小説作品ではなく、映画評や谷崎の小説を原作に映画化された作品について考察している。

第一章「谷崎潤一郎の〈映画離れ〉——ドイツ映画『ヴァリエテ』を手がかりに」は、谷崎が大正活映を去ったのちも映画制作に関心を寄せながら、〈映画離れ〉するに至った環境的要因を考察し、谷崎の〈映画離れ〉の理由について「谷崎潤一郎キネマ・スタア映画座談会」での発言などに注目しながら、〈ヨーロッパ（ドイツ）／アメリカ〉の規範意識をその要因のひとつとする。第一次世界大戦後、アメリカ映画が映画市場の覇権を握り、藝術的と謳われたドイツ映画も次第にアメリカナイズされてゆくが、日本でも話題となったドイツ映画『ヴァリエテ』の批評言説にもそれは如実に表われ、谷崎は藝術的なドイツ映画でさえも大衆化の波に抗えないことを実感し、「藝談」において〈映画離れ〉とともに藝術理念の立て直しを図ったと論ずる。

第二章「「春琴抄」映画化——島津保次郎『お琴と佐助』」は、映画化された谷崎文学

を研究するにあたり、ケーススタディとして「春琴抄」およびその映画化第一弾である『お琴と佐助』（一九三五）を取りあげている。「春琴抄」は谷崎の生前より映画化が繰り返され、今日まで六作品が公開されたが、谷崎自身は「春琴抄」を映画化の困難な小説と考え、盲目に象徴される視覚性の忌避が映画化の困難さに通じるとも指摘されてきた。『お琴と佐助』をめぐるのは監督島津保次郎と評論家・北川冬彦の間で論争も起こっているが、小説から映画へ表現メディアを越境する際に生じる不可避的な改変の問題性について考察する。

第四部「映画と文学の交錯」は、映画を視座とする谷崎研究から、より広汎な文学研究へフィードバックさせるべく二つの論文が書かれている。

第一章「映画への接近——芥川龍之介「蜃気楼」から谷崎潤一郎との論争へ」は、谷崎と芥川の間で交わされた文学論争に映画的な視点からの影響を措定した論文。谷崎との論争中に芥川はシナリオへの関心をほのめかし、「誘惑——或るシナリオ——」「浅草公園——或るシナリオ——」を発表している。また「文藝的な、余りに文藝的な」の主眼である「「話」らしい話のない小説」は、視覚的イメージと言語表現の相関性において模索されたと考えられ、「「話」らしい話のない小説」の実作に位置づけられる「蜃気楼——「続海のほとり」——」を映画的な視座よりとらえて、映像と言語の相関関係から生成される小説の表現について論じている。

第二章「大正期の映画物語本——映画を〈読む〉ということ」は、早稲田大学中央図書館特別資料室に所蔵されている、計二十一冊の映画物語本を紹介するとともに、映画のノベライゼーションに関する研究試論。映画物語本には映画のノベライゼーションのほか、映画の原作となった小説の翻訳・翻案なども含まれる。第二部第一章で言及された『ジゴマ』の爆発的な人気には、『ジゴマ』関連の映画物語本の影響が指摘されている。ジゴマブームという本格的なメディアミックスの成功例を踏まえ、映画物語本を調査すると、映画を〈読む〉という独特な受容文化がうかがえ、映画物語本は映画のノベライゼーションの枠組みを超えて、多様な受容形態を許容するものと論ずる。

3、総評

本論文は、日本映画の草創期からの熱心なオーディエンスであり、終生映画に興味を持ちつづけた谷崎潤一郎という作家が、映画というメディアをとおして、自己の文学にどのような「藝術理念や言語表現」を模索し、生成させていったかを跡付けたものである。同時に、谷崎の小説や映画に関するエッセイを「日進月歩する映画を見事に捉え」た一種のメディア史として再評価しようとするもので、そのために本研究の対象とする射程は、映画が映像で語る物語としての話法を洗練させる一方で、前衛的な表現の実験場として見出されていく第一次世界大戦後から、革新的なテクノロジーとしての「トーキー」導入の時期までとしていることには、一定の合理性が認められる。

本論文の独自性は、谷崎の藝術観の根幹が二〇世紀はじめの新興メディアとしての映画との対話に大きく影響されているのではないかと、という大胆な仮説を論じてゆくうえに、まず「映画」を歴史的に構築されたものと措定したことである。「映画」ははじめから現在のようなメディアとしてあったわけではなく、とりわけ谷崎が生きた時代は、映画が文

化産業としての発展と技術革新、表現者たちの創意によって、劇的に変化していった時期にあたる。その意味で、「映画」をめぐる同時代言説を踏まえて、「映画がもたらした認識の変容を積極的に藝術論へ取り込もうとする谷崎の創作態度」を取りだした第二部は、本論文の狙いと特質とがよくあらわれた論述となっている。

またこうした方法のために、必然的に文学研究と映画研究の双方を見すえた学際的なアプローチの採用が促されることとなった。従来の文学研究では、ともすればメタファーとして「映画的」という言い方が不用意に用いられたり、小説の映画化をめぐる議論が文学中心主義的な立場からおこなわれたりすることが少なくなかったが、映画が独自の産業的基盤を確立し、メディアとして独自の語法を獲得していった一九三〇年代以降を考えるうえでは、文学・映画それぞれに固有のコンテクストを視野に入れることが必要になってくる。第三部の「谷崎潤一郎の〈映画離れ〉——ドイツ映画『ヴァリエテ』を手がかりに」「春琴抄」映画化——島津保次郎『お琴と佐助』」などは、今後のこうした研究の可能性を切り拓くものといえる。

が、議論のなかで開かれるはずの問いが十分に展開されていないように見える部分も散見される。「映画」が歴史的に構築されたものとするならば、谷崎テキストに刻まれた映画論もまた一定の歴史性を帯びることになり、谷崎の映画観は彼のキャリアをとおして一貫したものだったのか、それとも彼の同時代のそれに合わせた変遷・展開を見せていたのか、もっと突っ込んだ説明が必要とされよう。また谷崎の映画論はさほど多くないなかで、本論文では、谷崎の小説作品に語られた映画に関する言及が積極的に参照される。そのとき、果たしてそれらを「谷崎の映画論」と即断してもよいものだろうか。本論文の立場を徹底させるならば、作中人物の語る映画論を同時代言説との関わりで把握したうえで、テキストに刻まれた映画に対する認識の歴史性と同時代に対する批評性を検討してゆく、という手順を踏むことも視野に入れる必要があったと思われる。

第四部第二章「大正期の映画物語本——映画を〈読む〉ということ」は、日本における初期映画の受容をめぐる、弁士とは別に活字メディアが介在していた可能性を指摘する。この着想は重要であるが、添付された表の書誌情報に発行所・印刷所の住所等の情報が記されていないことは問題であるし、初期映画の受容と活字メディアとの関わりを見るならば、もう少し広い視点に立って論ずることも必要だろう。また論者の考える谷崎の「藝術観」と映画との関わりを論証しようとして、肝腎の谷崎テキストからやや乖離しているのではと思われる記述も見うけられる。たとえば、第一部第一章「谷崎文学と映画——〈Crystallization〉が照射する藝術表象の煩悶」では、谷崎の「活動写真の現在と将来」に記された〈Crystallization〉の語に注目し、同時代の映画言説とは位相の異なる理解がはらまれていたとの指摘がある。が、この語が谷崎の諸作を位置づけるキーワードたり得るかについては、より慎重かつ詳細な議論が必要だったのではないだろうか。なおまた、谷崎が複製藝術のもたらずキツチュさと「藝術」という概念との間にどんな折りあいをつけようとしていたのか、もう少しことばを費やす必要があったのではないか。

以上のような点はあるものの、本論文は全体として、既存の理論や方法を先験的に当てはめるのではなく、対象とした個々のテキストや課題に関する多くの資料を博捜し、文学・映画それぞれの文脈を確実に押さえてゆく。その議論の運びは、今後の興味深い研究の方向性が示されているばかりか、研究のさらなる深化も期待させる。これまでの文学研究

の枠組みにとらわれず、新たな領域を開拓しようとする意欲と問題意識は高く評価されるものである。本論文の議論を出発点として、今後の研究にさらなる進展が期待されるころが大きい。

審査委員一同は、本論文が博士学位論文にふさわしい、すぐれた達成を示していると判断し、全員が一致してこれを「博士（学術）」の学位授与に値するものと認めた。